

げんでん ふれあい 福井

2010 SUMMER 第37号



教育・文化ふくい創造会議（第三次提言）

生誕百年に寄せて「白川文字学」と福井（中）

ふるさと福井「食育の祖 石塚 左玄（三）」

財団法人げんでんふれあい福井財団は福井県の文化振興とふれあいとゆとりのある地域づくりに寄与することを目的にしています。本誌はこの主旨に従い県民のみなさんとの絆を大切にした広報誌を目指します。



財団シンボルマーク

CONTENTS — 37

- 教育・文化ふくい創造会議
(第三次提言) 2
- 「白川文学学」と福井(中) 4
- ふるさと福井・人物シリーズ
「食育の祖 石塚 左玄(三)」 6
- 第13回 風花隨筆文学賞
財団受賞作品紹介 8
- ふくいの伝統行事シリーズ
「沓見のお田植え祭り」 10
- 敦賀市立博物館誌上ギャラリー／31 11
- 福井の文学碑「俳人 尾崎 放哉」 12
- 福井の民俗文化 シリーズ2
「福井県の虫送り」 13
- 情報ファイル 14

FRONT COVER



「沓見のお田植え祭り」

〈敦賀市〉

毎年5月5日の子供の日に開催される、敦賀市沓見の春祭りは「お田植え祭り」とも呼ばれ、以前の水苗代の時代にはこの祭りが消まないと全村田植えができませんでした。それほど区民にとっては重大な農耕神事として位置付けられていたことがわかります。幕末の記録にあるように、祭日や祭祀組織に変遷はあるものの、今なお王の舞・獅子舞・田植え歌・田植え式などの中世以来の民俗芸能が、氏神信霧彦神社(男宮)と久豆弥神社(女宮)に古式ゆかしく奉納され、最後の両社の渡御の際に馬場先で御幣合わせの神事が行われ、氏子や見物客によつて御幣の奪い合いがあり、春祭りのクライマックスを迎えます。

教育・文化ふくい創造会議 第三次提言

— 日常を楽しむ暮らしを実現し、福井文化を支え、高める —

平成22年2月

福井県の文化振興を検討する「教育・文化ふくい創造会議」が平成22年2月9日、第3次提言をまとめ西川知事に提出しました。今回その内容を紹介いたします。

今回の提言

平成19年8月に設置された「教育・文化ふくい創造会議」において、これまで第1次では「教員の指導力向上」など、第2次では「学校マネジメント改革」などの教育問題を中心に提言をとりまとめました。平成20年1月にスタートした第3次会议においては

「ふくい文化の振興方策」について議論を進め、委員13人が6回の会合のうちにこれを取りまとめ、祖田座長より西川知事に提言書が提出されました。

提言書では冒頭で「社会の閉塞感を打ち破り社会を活性化させるものは、まさに文化の持つ創造性に他ならず、暮らしの質の向上に欠くことができないもの」としたうえで、「日常生活を楽しむ暮らしを実現し、福井文化を支え、高める」ための8つの提言を行っています。

子どもたちに、ふくいの文化に触れる機会を創出することや、地域の文化



「平成14年の福井教育振興ビジョン」と
「平成22年の教育・文化創造会議第3次提言」

資源をまちづくりに活用すること、本県独自の文字文化を高め発信していくことなど、具体的で幅広い内容となっており、県では部局を横断した推進体制を新たに立ちあげて全庁をあげて総合的な施策を展開していくとしていま

す。この提言にもとづき、県が平成22年度に実施していくこととしている施策の一部を紹介します。

主な事業

ふれあい文化子どもスクール開催事業

県内の小学5年生（約8千人）を対象に、本格的な参加体験型「コンサート」と併せて県立文化施設での体験授業を行うことにより、子どもたちの感性豊かな心を醸成し、福井の文化やふるさとに対する関心・理解を促進します。（県立音楽堂でのふれあいコンサート・美術館・歴史博物館・こども歴史文化館・恐竜博物館等での体験授業）

中国古代文化や漢字研究の分野で偉大な功績を残された白川博士の生誕百年を記念して、博士の偉業を改めて顕彰するとともに、立命館大学や県外の自治体と連携して漢字をテーマにしたシンポジウムを開催し、白川文字学のふるさと福井を全国に発信します。

（生誕百年記念フォーラムへ4月▽・パネル展△7月▽・シンポジウム・白川文字学公開授業△7月頃▽）

「白川文字学」活用推進事業

白川文字学を活用した本県独自の漢字学習を県内全小学校で行うとともに、子どもから大人まで楽しく学べる漢字教室を開催するなど、白川文字学のさらなる普及を図ります。

以下「教育・文化ふくい創造会議」の提言内容の概要を紹介します。

地域の中核的な文化財の整備を集中的に進めることにより、地域の文化遺産を生かした個性的で魅力あるまちづくりを支援し、観光をはじめとした人々の交流促進を図ります。

（整備文化財
一乗谷朝倉氏遺跡・白山平泉寺境内・明通寺本堂・三重塔・小浜市小浜西組・若狭町熊川宿）

越前焼発掘調査事業

越前焼の文化財指定を目指して、越前焼の分布状況、生産体制、流通状況など产地の歴史的な価値を明らかにし、地域の活性化や観光誘客等につなげます。



「文字の国 福井」を伝える新聞
(2月23日福井新聞)

白川静博士生誕百年記念事業

I 文化のある生活

～暮らしの中での文化を楽しむ風土をつくる～

提言1 身近に文化を感じる環境をつくる

■身近な文化をみつめなおし後世に残す
住民自らが、生活様式や景観・歴史・習俗などを見つめなおし、これから優れた地域資源を様々な形で記録収集する「平成ふくい風土記」をして全県下で展開

「ふくい県民総合文化祭」を発表を中心とした内容から体験交流を重視した内容に転換

■「ふくい文化をテーマにした企画展」の開催として、美術館・博物館をもつと身近に

来館者に満足してもらえるサービスを提供するため、「キッズミユージアム」や長期的な「パスポート」の「歴史をテーマにした企画展」の開催

■提言2 子どもたちの文化素地を培う
すべての子どもたちに本物の文化芸術体験を授業と施設体験を組み合わせた文化教育の推進

ハーモニーホールでの音楽鑑賞や楽器体験、美術館・博物館・こども歴史文化館等での「ふるさと文化スクール」の開催

■提言3 地域固有の文化資源を生かして
地域の歴史的魅力の向上

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡・重要伝統的建造物群保存地区指定の熊川宿・小浜西組・白山平泉寺など地域づくりの鍵となる地域の中核的文化財を集中的に整備

■提言4 文化の力で産業力を強化する
地域や文化を観光資源として活用

文化と観光の連携を強めながら、「マーチ」として歴史や文化スポットを選び、ストーリー性を持たせ、地域の文化資源を観光資源として活用促進

伝統工芸などについて、現代の生活から導かれる新たなデザイン開発により、既存のイメージにどうわざない新しい美術工芸品として展開

提言5 文化的創り手・演じ手を育てる

■文化団体の活動向上
文化団体における次代のリーダー育成に向けた取組みの推進と文化団体（活動者）と県外活動者との交流の場の提供

■ハーモニーホール、美術館を核とした音楽人材・美術家の育成

セミナーの充実を図るほか、小・中学校への弦楽部設置を推進し、県民オーケストラの育成を推進

■提言6 地域の文化活動を応援する
地元企業による文化活動の応援

地元企業の地域に根ざした文化活動に対し、これまで積極的に参加・応援でさるような仕組みづくりや、企業のメセナ活動事例の紹介、企業の応援活動に対する顕彰制度を設置

■提言7 「文字の国 福井」を発信する
「白川文字学」による漢字教育の充実

「白川文字学」を活用した本県独自の漢字学習を検証し、さらに充実させるとともに、県外にも普及推進

■提言8 全国に誇るべき先人に学ぶ
福井の偉人を学ぶ

福井ゆかりの先人・達人の業績や人物像を知り、地域の誇りとしてもわかつため、先人に学ぶ講座や、ゆかりの地を巡るバスツアーなどを開催

■提言9 幕末福井を全国にアピール
松平春嶽の「逸事史補」など幕末閑連書籍の現代語訳推進や講演会を開催するなど、全国にアピール

■文化により産業の付加価値を高める
越前焼等の地場産業の歴史的な価値を明らかにし、産地全体の魅力向上

伝統工芸などについて、現代の生活から導かれる新たなデザイン開発により、既存のイメージにどうわざない新しい美術工芸品として展開

「白川文字学」と福井(中)

文：佐野周一

—郷土愛を温めて半世紀—

生誕地に記念碑建立

白川静先生の功績を顕彰し、「白川文字学」を次代に継承するために平成19年10月21日、福井市大手町丁目(フエニックス通り沿いの歩道に「白川静生誕之地」記念碑が建立された。白川



生誕地跡に建立された記念碑

は「出世石」と呼ばれており、石の表面に雲母がキラキラと輝いているのが特徴。その記念碑正面に、「遊」という字のもとになつた古代文字が刻まれている。吹き流しをつけた旗竿の形と子という字を組み合わせて、旗竿を持つ人の姿を表している。旗には神靈が宿り、神雲が行く、神とともに気ままに行動する姿で、後に、「遊」は人が興のおもむくままに行動して楽しむという意味に用いられるようになった。

そして、石碑には、有名な「遊字論」冒頭の格調高いフレーズが刻まれている。

（遊）遊ぶものは神である。神のみが遊ぶことができた。遊は絶対の自由とゆたかな創造の世界である。それは神の世界に外ならぬ。この神の世界にかかわるとき、人もともに遊ぶことができた。

先生の長女、津崎史さんと西川知事らが参列した。

記念碑は縦1・2m、横70cm、奥行き45cmの白御影石（1・1t）で、愛知県岡崎市で産出した花崗岩。岡崎で

旧四の丸の濠端に生家

断定して、たたみかける力強い文体とゆつたりした構え、「白川文字学の

は「出世石」と呼ばれており、石の表面に雲母がキラキラと輝いているのが特徴。その記念碑正面に、「遊」という字のもとになつた古代文字が刻まれている。吹き流しをつけた旗竿の形と子という字を組み合わせて、旗竿を持つ人の姿を表している。旗には神靈が宿り、神雲が行く、神とともに気ままに行動する姿で、後に、「遊」は人が興のおもむくままに行動して楽しむという意味に用いられるようになった。



遊 古代文字

旗を揚げて、人文科学の分野で東洋思想のカリスマとなつた白川先生は、

この地、旧福井市佐佳枝中町で明治43年（1910）4月9日に生まれた。

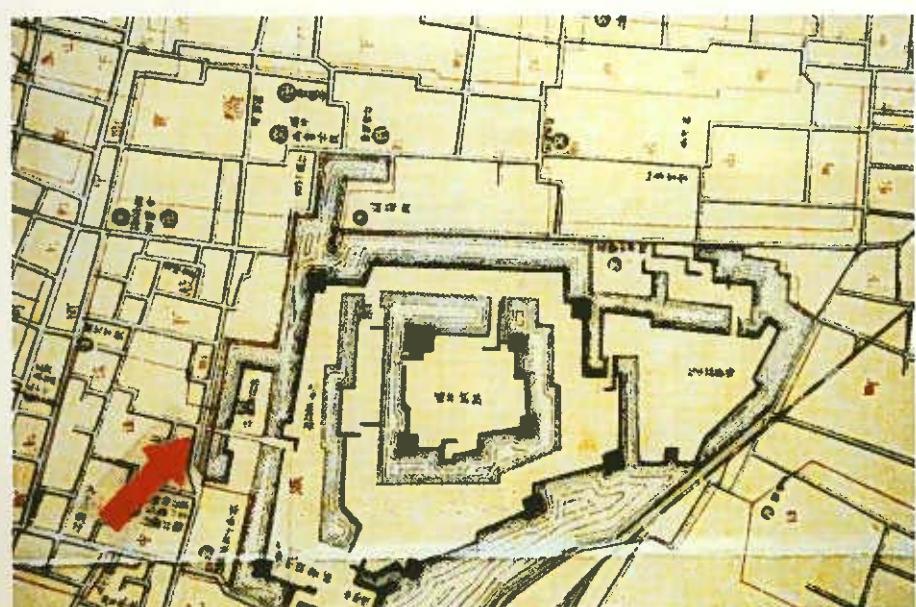
る。

家は通りに面して半分、あと半分は濠に松材の乱伐を打つて、板敷きの間

を張り出してあつた。そこから見渡すと、向こう側には濠の石垣が連なり、

濠端に沿うこの南北の通りは、通称、大名町と呼ばれる。大名町通りに面した橋詰めに鳥居があり、その向かつて右側の洋服屋が私の生家であった（私の履歴書より）と記している。

明治時代には福井城下



大正初期の福井城下図 矢印に生家があった

佐野周一氏
Suiichi Sano

1942年（昭和17年）12月、福井市生まれ。金沢大学法学部卒。1965年、福井新聞社に入社。新聞記者30年の経験を経て、同事業局長、専務取締役、特別顧問などを歴任。2009年6月に退任した。県の教育文化ふくい創造会議座長代理など務めた。現在、県詩人懇話会副代表、日本文字文化機構文字文化研究所理事。

お濠までは30間～40間（50～60m）の距離があったという。男兄弟が4人だった。お濠に張り出した板敷きの間から釣りザオを出して魚釣りをしたり、夏などはしき油樽を浮きにしてお濠で泳いだという。濠にかかる橋を渡り、佐佳枝迺社の境内で遊んだ話やランプのぼやの手入れを手伝つたり、兄が借りてきた立川文庫の本を読んだことなど、少年時代の日々を鮮明に記憶している。

兄弟の名前は皆、二文字だったが、白川先生だけは「静」という一文字。母の希望により名付けられたそうで、その名前を大変、気に入っていたらしく、余談だが、名前が似ているというだけで、冬のトリノ五輪女子フィギュア、金メダリスト、荒川静香選手のイナバウアーを散歩の途中、マネをして、柔軟体操をしていたという。チャメツ氣のある人柄だった。

同級生も多士済々

白川先生は、大正6年（1917年）、福井市立順化尋常小学校へ入学した。この順化小学校は「当市街」最モ第1「創立セル小学校」として、明治2年（1869）に木蔵小学校が創立され、明治20年、桜、錦、晚成小を併合して順化尋常小学校となる。白川先生が入学した当時は、市内の旧馬場通りにあつたという。戦災、地震、水害など幾多の災害に遭遇しているにもかかわらず、創立以来の同窓生名簿がほとんどそろっているのが珍しい。

平成12年（2000）発行の順化小同窓会名簿によると、白川先生は大正12年3月に卒業。男子2、女子2クラス

で、同級生は44人いた。白川先生が名前を挙げた同級生は、佐佳枝郵便局長だった岩永末雄さん（旧佐佳枝上町）はじめ佐々木茂さん（佐佳枝中）、吉田太郎さん（佐佳枝上町）の3人。順化小を卒業した後、大阪の広瀬徳感法律事務所に入つたが、4年後の17歳の時、病氣で一時帰省した。2カ月間、実家で療養した後、再び大阪へ旅立つを鮮明に記憶している。

兄弟の名前は皆、二文字だったが、

伝つたり、兄が借りてきた立川文庫の本を読んだことなど、少年時代の日々を鮮明に記憶している。

白川先生だけは「静」という一文字。母の希望により名付けられたそうで、その名前を大変、気に入っていたらしく、余談だが、名前が似ているというだけで、冬のトリノ五輪女子フィギュア、金メダリスト、荒川静香選手のイナバウアーを散歩の途中、マネをして、柔軟体操をしていたという。チャメツ氣のある人柄だった。

故郷への想い深め

この一時帰省中、実家の前に住んでいた佐々木文苑という人と交流を深めている。後に佐々木は福井の郊外に移転するが、その新居を訪ねた時の様子を次のように書いている。

江戸喜久治、戦後、抽象画家として活躍した富田惣七、戦前、独立美術展で注目され、31歳で亡くなつた末定豊らがいた。大正12年卒の順化小同級生は、白川先生はじめ多士済々の人物を輩出している。

福井を離すに心痛める

平成13年（2001）10月中旬

旬、社用で京都市西京区桂福山の自宅を訪ねたことがある。白川先生は旅をする替わりに旅行記を読んで、旅の気分を味わっていた。9・11同時多発テロで、世界貿易センターが崩れ落ちた1カ月後だった。「今、マルコ・ポーロの東方見聞録を読んでいるところ。アフガニスタンの項を読むと、同時に多発テロがどうして起つたのか、歴史的な背景が分かる」と話す

んだことがある。写しながら理解することができた。（略）佐々木先生はなかなか、博識の方であった。漢詩はもとより万葉調の歌も詠まれた。隠書はも地にお息づいてることに驚嘆した（私の履歴書から）

佐々木文苑という人は県庁の役人だった岩永末雄さん（旧佐佳枝上町）はじめ佐々木茂さん（佐佳枝中）、吉田太郎さん（佐佳枝上町）の3人。順化小を卒業した後、大阪の広瀬徳感法律事務所に入つたが、4年後の17歳の時、病氣で一時帰省した。2カ月間、実家で療養した後、再び大阪へ旅立つを鮮明に記憶している。

同級生にはそのほか、民俗研究者で、戦時中、福井新聞社の記者もしていた江戸喜久治、戦後、抽象画家として活躍した富田惣七、戦前、独立美術展で注目され、31歳で亡くなつた末定豊らがいた。大正12年卒の順化小同級生は、白川先生はじめ多士済々の人物を輩出している。

「故郷とは、故郷を離れて住む者が、その「つぶすな」の地を呼ぶ名である。異郷にある者のみがこの語を用いることができる。それで、故郷という語はつねに郷愁を伴う」と語っている。

福井での講演会は次の通り。

- ▽ 2000年11月11日、フェニックスの短歌史の位置について
- ▽ 2005年5月15日、生活学習館・ユーハイ・ふくい・文字教育について
- ▽ 2005年3月30日、福井まちなみ文化施設・響のホール・橋曜覽

改めて白川先生の好奇心と郷土愛の深さに心を打たれる。



「福井県民賞」を受ける白川先生=平成14年2月7日のふるさとの日

かり、「豪雨見舞の義えん金を送った人がどうすればいいのか」と問い合わせがあるほどだった。

90歳半ばを迎える中、体調を危ぶみながらも、2000年以降福井で4回も講演している。

石塚左玄の功績と現代への警鐘 (三)

文／岩佐勢市

筆者プロフィール



岩佐 勢市氏
Seiichi Iwasa

1949年福井市に生まれる。鳥取大学卒業。JA経済連・JA厚生連に奉職。前JA福井県厚生連理事長。職務の関係から住民健康管理のうえで、特に子供の食育に注目。現代の子供達の食生活の乱れを憂う。自らもスローフードの研鑽ならびに、福井市生まれで食育の祖と言われる石塚左玄の研究を進め、業績の紹介とともに、食育の重要性の啓蒙と、食と運動による健康づくりを提案している。石塚左玄の業績に詳しい。

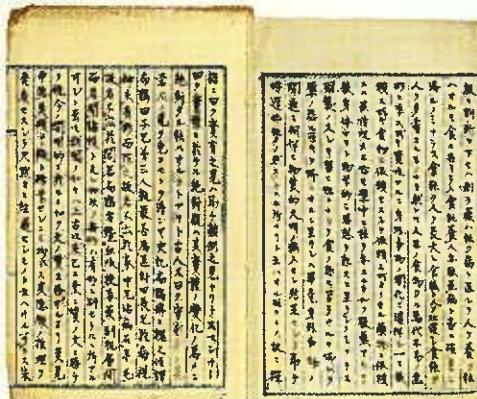
の言葉と左玄が言った「**食育**」の重要性を文にしました。

日本人には日本人にあつた 食生活がある

左玄功績の第2点は、時の明治政府は欧米諸国と肩を並べるべく積極的にあらゆる海外の物を取り入れました。

立憲政治を目指し、社会の制度も欧米を見習うべく多くの視察団や留学生をして外国の専門家の招聘を行い、結果的に教育・医学等の欧米の文明を導入出来ました。このように文明開化の波が押し寄せ、多くの国民が洋風化を目指して日本人の健康を左右する食生活までが大きく見直され、伝統的食生活が洋風化に変わっていく様子を左玄は憂慮すべき事態と見ていました。そして「日本人が洋風化の食生活をすると、多くの者が病気になる」と警鐘を出しました。続けて「日本人には日本人にあつた食生活がある。地域には地域に根付いた食生活がある。」と言ったのです。

地域の食生活は地域の文化です。食は地域を現す文化の大きな要素を占め



「化学的食養長寿論」原本

左玄の多くの弟子達が「**食育**」を普及させましたし、左玄の同時代の人気作家であった村井弦斎※1は「食道樂」という本を書きその中で「**食育**」

が息づいたのです。

初めて使い政府、国民への啓蒙を行つた事です。彼が「**食育**」の言葉を本に書き残した事で、今の時代にも「**食育**」

を整理して見ましょう。私は左玄が食

今回は今から159年も前の江戸時代に福井で生まれた石塚左玄がどうして現社会の中で食育の祖とも呼ばれ、関係者から尊敬されているのか?そして何らかの形で食育に関心や触れた事がある人にとって食のバイブルとも言われる左玄の訓えとは何か見て行きましょう。

石塚左玄の功績と 現代への警鐘

明治時代の石塚左玄の訓えが100年以上も経過する現代社会にも十分に通用するのは、人間が生きていく上で基本となる食生活について、いつの時代でもどこに住んでいても、そして誰もが絶対に変える事の出来ないそして守らなければならぬ事基本的な事を私たちに教えているからです。

時代と共に変化し時代に適合していくければいけない事も日々出てきます。しかし左玄は食は如何なる理由であっても変えてはいけない物として食を捉えていました。

ここでは、石塚左玄の果たした功績を整理して見ましょう。私は左玄が食

について果たした功績は4つあると考えています。

1. 「**食育**」の言葉を初めて本に書いて同時に食育は家庭教育であると啓蒙。
2. 文明開化で食・食文化・食生活が洋風化の大変革で病気が増加するとの警鐘
3. 左玄流の食育・食養論を確立マクロビオティックの原理となる。
4. 食育基本法の生みの親

食育という言葉を初めて活字にして、子供にとって一番の教育は食育である。

まず第1点です。食育の祖とも食育基本法生みの親とも呼ばれている石塚左玄の最大の功績はなんと言つても彼が明治29年に書き著わした「**化学的食養長寿論**」の中に「**食育**」なる言葉を

初めて使い政府、国民への啓蒙を行つた事です。彼が「**食育**」の言葉を本に書き残した事で、今の時代にも「**食育**」

が息づいたのです。

【学童を有する民は都會魚鹽地の居

住民は殊に家訓を厳にして躰育・智育・才育は即ち食育なりと觀念せざるや願くは我国中往古時の食養法と料理法と化学的の食養法とに意を留めて……と子供の教育で一番大事で基礎となるものは、食育でありしつかりとした家訓が重要であると主張をしました。

筆者プロフィール

岩佐 勢市氏
Seiichi Iwasa

1949年福井市に生まれる。鳥取大学卒業。JA経済連・JA厚生連に奉職。前JA福井県厚生連理事長。職務の関係から住民健康管理のうえで、特に子供の食育に注目。現代の子供達の食生活の乱れを憂う。自らもスローフードの研鑽ならびに、福井市生まれで食育の祖と言われる石塚左玄の研究を進め、業績の紹介とともに、食育の重要性の啓蒙と、食と運動による健康づくりを提案している。石塚左玄の業績に詳しい。

ています。だから地域での食生活の変更は栄養の摂り方の違いだけではなく、地域の変革を意味します。

左玄は食文化の領域までは言及していませんが、現代社会において日本の大変化・地域の変貌は正にこの地域の食文化が退廃した事と非常に関係があります。日本歴史上、食生活の大変革は3回あつたと言われます。1回目は稻作が行なわれるようになり、定住社会となり米食が始まった縄文・弥生時代です。2回目がこの明治の洋風化の走りです。肉食が推奨され、伝統食が否定され、主食の米ご飯もそれまでの玄米食から白いご飯食に変わりつつある時で、その白いご飯食のために玄米に含まれていた栄養素が失われ、当時の食生活ではその失くした栄養を摂れるほどの副食もありませんでした。その結果白いご飯食の多くの者が栄養失調となり、脚気等の重症な病気で死亡をするようになりました。日清戦争の陸軍の事例はそれを証明しています。

当時の日本政府は富国強兵の中で兵士に喜んで貢うために白いご飯を兵食としました。しかし表からも明らかに兵士は銃砲で死んで死んだのです。直接の戦闘等で亡く

表1：日清戦争と陸軍の脚気病（名）吉村昭著「白い航跡」より

戦死者	戦病者	脚気死亡	脚気病
977	293	3,944	34,783

なった兵の3倍の兵が朝鮮半島や台湾において脚気で死亡しました。ましましたが、そこにはドイツ栄養学を信奉する軍医森鷗外の責任は大であったと言われています。そして日露戦争になるとこれらの数字は約10倍にもなります。

左玄は外国のカロリーを中心とした栄養学、それは炭水化物・脂肪・タンパク質を重視しその他のミネラル成分を無視した栄養学に反発し、ミネラルのNaとKが特に人間にとて重要であると所謂「夫婦両児加里論」を開示しました。いち早くNaとKのミネラルが栄養摂取に大きな働きをしていると考えたことは当時の栄養学の中でも特筆されるべきでしよう。

因みに日本歴史上3回目の食の大変革は、正に私達が生きている飽食と呼ばれる食生活です。

医食同源とか薬食同源とか言われてそれなりに食の重要性は訴えられていますが、現代社会では食が薬になるどころか食源病となり、生活習慣病等の最大の原因になっています。

左玄としての 食育・食養論を確立

3点目は左玄独自の食養・食育論を築き上げた事です。私は左玄が言わんとした食育は六つに整理しています。

1. 家庭での食育の重要性

食育は子供にとって全ての教育の基本であり、食育は親が

そして大事な事は左玄のこれ等の思想が左玄の弟子達によって更に発展し、マクロビオティック (Macrobiotic) として世界に普及発信されたのです。マクロビオティックは「長寿食」とか「自然食」などと理解されていますが、世界史の中で食の運動として始めて世界的に運動展開されたのが、このマクロビオティックです。今イタリア発のスローフード運動が世界に流行をして

*1 村井弦斎(1814~1902) 愛知県豊橋出身 報知新聞記者で作家の仕事も行い「食道楽」はグルメ雑誌としてベストセラーにもなり、西洋料理などの紹介も行い合わせて石塚左玄の提唱した「食育」が子供にとって一番大事であると書きました。晩年は豊橋に住み自然食を実践。

家庭で行つものであると言っています。

2. 命は食にあるという 食養道の考え方

心身は食によって作られ、食が人の健康を左右するという食養生の基本です。

3. 人は穀食動物である

人はその歯や頸の形状から雑食や草食や肉食ではなく穀物を主に食する動物です。

4. 食物は丸ごと食べる全体食

栄養は食べ物の一部分でなく全体にあるから全休食がいい。地産地消で地域の新鮮で旬の物を食する

5. バランのスのある食事

世界は陰陽二元の原理に支配されてその調和の上に成立しているという様に食もバランスが大事という論。

これ等の事は次回から学んで行きましょう。

4点目の功績は、4年前に食育基本法という法律が出来ました。生活習慣病の増加の原因が乱れた食生活であり、低下する一方の食料自給率に歯止めをかけるため、家族一緒に食事もなく家庭崩壊の要因ともなっている事や食の偽装が頻出し口に入れる物の安全・安心のために制定されました。

この食育基本法の前文等は左玄が提唱した食の訓えが丸ごと生かされています。仮の話ですが、もし左玄の存在がなければこの法律はかなり変わった内容で誕生したでしょう。食育という言葉自身が使われることもなかつた可能性があります。

いずれにしろ左玄の功績が現代社会に生きている私達に大いに学ぶべきものとなっています。

いますが、遙か以前に日本人によって石塚左玄の訓えを発展させたマクロビオティックが今も綿々として続いています。左玄の原点は食と健康であり、スローフードの原点は食と地域と文化であるなどの相違がありますが、両者の思想と実践はかなり似通つた点があります。

風花隨筆文学賞

最優秀賞へ一般の部に
宮本 晃子さん（東京都）

平成21年度の「風花隨筆文学賞」（同実行委員会主催、当財団特別協賛）の授賞式が3月13日福井新聞社・風の森ホールで行われました。

この文学賞は、福井市出身の芥川賞作家津村節子さんの隨筆「風花の街から」にちなんだ名称を冠した賞で、平成9年度に創設、14年度から実行委員会により運営されており今回は13回目です。

応募作品の審査委員長を務められている津村節子さんから入賞者15人が表彰されました。津村さんは、「この賞の知名度が高くなり県外からの応募が増えました」との作品を選ぶべきか非常に悩みました」と評価し、入賞作品つひとつに講評されました。

今年度は国内外から一般の部に1465編、高校生の部に1718編、計3183編の応募が寄せられ慎重な審査が行われました。最優秀賞、優秀賞受賞の皆さんには、次のとおりです。（敬称略）

▼ 最優秀賞・福井県知事賞 宮本晃子（東京都）「オムライス」

▼ 優秀賞・福井新聞社賞 中村祥子（岩手県）「無い、もないから」

▼ 優秀賞・仁愛女子短期大学賞 口忍よしみ（山梨県）「おばすて」へ

▼ 優秀賞・げんでんぶれあい福井財団賞 宮西祐里（福井県）「心をつなぐローカル線」

▼ 優秀賞 高橋正美（埼玉県）「ツキヌキ」（ノンドウ）

高校生の部

▼ 最優秀賞・福井県教育委員会賞 小澤郁美（仁愛女子高校）「バスと私」

▼ 優秀賞・福井新聞社賞 八橋萌（長野県蘇南高校）「聞こえないアスリートを目指して」

▼ 優秀賞・仁愛女子短期大学賞 保坂美季（山梨県英和高校）「ユ・ガ・ン・スンに導かれて」

▼ 優秀賞・げんでんぶれあい福井財団賞 吉田里沙（武生商業高校）「空色を知る」

▼ 優秀賞 前川 幹（高志高校）「十六歳の僕の生きる」

▼ 優秀賞 永田美穂（武生商業高校）「希望の箱」

受賞作品紹介

げんでんふれあい福井財団賞
「心をつなぐ
ローカル線」
た。あれから
の短大に通つて
通いつたもの

た。あれから今年で五年目、今は県内の短大に通っている。

心をつなぐ ロード

口一カル線

一般の部 優秀賞

宮西祐里さん
(福井県大野市)

「次は牛ヶ原、牛ヶ原です。」
もう何回、このアナウンスを聞いた
にろう。

れる生活が苦痛で仕方なかつた。しかし、しばらく通つているうちに、電車にも慣れ、他校の友達も増え、次第に電車に乗ることが、私にとっての楽しみとなつていつた。

この電車はいわゆるローカル線である。電車に乗つてゐる大半がお年寄りという、ワンマン電車だ。

こんな出来事があつた。学校が少し遅れ、私は大急ぎで駅まで走つた。しかし、結局間に合わず、諦めてホームをとぼとぼ歩いていた。すると、もう発車したはずの電車が私を見つけ戻つ

てきてくれたのである。私は最後の力を振り絞り、電車に駆け寄ると、恵を切らしている私に、誰一人として文句を言わず、「お疲れ様、間に合ってよかつたね」とさえ、声を掛けてくれる。

普通、ダイヤが決まっている電車が、乗り遅れた人がいるからと言って戻ることなどあり得ない。しかも、この光景は決して珍しいことではない。

また、ある吹雪の日のことである。他の電車は運行を中止している中、このローカル線は運行した。しかも、山に向かって…。しばらくは何の問題もなく、すんすん突き進み、意外と行けるかも、そう思った瞬間「ガガツ」：やはり止まってしまった。結局、電車は動かず、降りて次の駅まで歩くことになった。これはさすがに皆怒るだろう。そう思っていた。しかし、この時もまた、誰一人として文句を言わず、

皆で雪道を歩く光景が、どこか楽しそうにさえ見えた。この電車に乗るといつも、車掌さんと人々の温かさがひしひしと伝わってくる。

そんな平穏な日々の中、あの福井豪雨がやってきた。その影響で線路や鉄橋が流され、電車が走れなくなってしまったのである。その日から、電車、バス、電車と二回乗り換えながら学校に通う日々が始まった。

大変そう…。初めはそう思っていたが、違った。乗り換える時、雨が降つていれば傘を差し出す人、盲目の人に肩を貸し、バスまで誘導する人、おばちゃんのバスの乗り降りを支え、手伝う人、乗り降りの際、「いってらっしゃい」「おかえり」と声を掛けてくれる運転さん…やはりそこには、優しさが溢れていた。

皆で雪道を歩く光景が、どこか楽しそうにさえ見えた。

この電車に乗るといつも、車掌さんと人々の温かさがひしひしと伝わってくる。

そんな平穏な日々の中、あの福井豪雨がやってきた。その影響で線路や鉄橋が流され、電車が走れなくなってしまったのである。その日から、電車、バス、電車と二回乗り換えながら学校に通う日々が始まった。

大変そう……。初めはそう思っていたが、違った。乗り換える時、雨が降つていれば傘を差し出す人、盲目の人に肩を貸し、バスまで誘導する人、おばちゃんのバスの乗り降りを支え、手伝う人、乗り降りの際、「いらっしゃい」「おかえり」と声を掛けてくれる運転手さん……やはりそこには、優しさが溢れていた。

第13回 風花隨筆文学賞 授賞式



作家津村節子さん（前列中央）を囲み表彰記念撮影

電車が復旧し、開通した時は皆で祝つた。私も一日駅長に選ばれ、復旧式に参加し、出発の合図をした。右手を大きく上げると、皆の拍手を背に、ゆっくりと走り出した。大変だったはずなのに、嬉しさと共に、どこか寂しい思いをした。

この五年間、電車の中で多くの出会い人々があたたかさにふれることがいざえした。

できた。

このローカル線は、乗ると「お互い様」と、自然と席を譲りたくなる、そんな電車なのだ。

この前、いつものように改札を通ると、ある駅員さんに呼び止められた。一瞬ドキッとしたが、駅員さんはこう続けた。

「実は私、明日から鯖江駅に転勤にな

りまして、ここでお客さんを見送るのが今日で最後になるんです。ずっと電車で通ってくれてありがとうね。これからもよろしくね。」

砂のお守りをくれたおじさんだ。

「ありがとうございます。長い間お疲れ様でした。向こうの駅でもがんばって下さい。」

そう言つて、電車に乗り込んだ。



高校生の部 優秀賞

吉田里沙さん
(武生商業高校)

「空色を知る」

記憶になくとも身体は覚えている。病気が治った今も、それは変わらない。

急性リンパ性白血病。それが私に与えられた病名だった。足が痛くて歩けないからと医師に診察してもらつた結果だった。十万人に一人と言われる血液のがんに、私が選ばれたのだ。「長く生きられない」と診断されたこともあつたらしい。保育園児だった私がそれを理解できるはずもなく、他人事のように待合室に居た。ただ、涙を流す母が気がかりだったのは覚えている。

すぐに入院生活が始まった。血液検査に薬、抗がん剤治療。辛くて痛くて苦しくて、どれも嫌だった。特にしば抜けで嫌だったのが腰に針を刺す骨髄穿刺の時だ。部分麻酔のおかげで痛みはなかつたが、筆舌に尽くし難い不快感がある。それだけで終わればいいの

だが、私の場合は違つた。しばらくの間、嘔吐に悩まされるのだ。普通はそれがないらしい。おそらく体内へ薬品が入ることを、私の精神が拒絶するのだろう。酷い時で胃液しかでないこともあり、今でも、想像するだけで嘔吐感が襲う。こういった治療が嫌で、泣きながら暴れるのが日常茶飯事だった。それも含めて、私は周りに苦労を与えていたのだ。そうであつても、私は見捨てられることなどなかつた。むしろ、皆が辛いことを忘れさせてくれた。

そのためか、「生きるか死ぬかの瀕戸際だった」と母から教えてもらつても、しつくりこなかつた。病気が治つた今は「へえ、そうなんだ」としか言えない。それ程自分にとつて「白血病」というものは遠い存在である。否、自ら距離をおいているのだ。私は、病気だつた頃の話を聞くたくない。胸の辺りがモヤモヤとして、どうも落ち着かないからだ。終わつたことなのに。そ

れでも正直、入院生活に苦などなかつたのではと思うときもある。薬を飲むこととりハビリへの煩わしさだけが苦に当たる。しかし私は意外にも、入院を楽しんでいたのではないだろうか。それに、寂しいこともなかつた。母はすつと傍に居てくれたのだ。父も毎日のようにお見舞いに来てくれた。逆に、弟が寂しい思いをしていただろう。なのに、「早く病気を治して元気になつてね」と言ってくれた。病院生活を振り返つてみると、いい思い出ばかりである。

真っ暗な病院で母とくれんぼをした。縄跳びをして、点滴の針がずれた。そして、何よりも母と見たオレンジ色の空がきれいだった。初めて、夕焼け空を見たような感覚だったと思つ。とても穏やかな気持ちになり、その日は機嫌がよかつた。このことがあつてから、落ち込んだ時は空を仰ぐようになつたのだ。

青空は気持ちをスッキリさせ、夕空は心を穏やかにしてくれる。それはまるで、家族のようだ。知らぬうちに、沈んだ気持ちを緩和してくれる所が似ている。嫌なことなんて、まるでなかつたようにしてくれる。黒い色を明るい空色に塗り代えるように。私を支えて

少しの寂しさと共に、妙に心温まる思いがした。ずっと見ててくれたんだと…。

私はこの電車が大好きだ。そこに乗

れば、優しい人々との出会いがある。

そして、窓から見える景色が、何より最高なのである。

くれた人たちは、同じことをしてくれた。今の私に、病院生活で辛かつた時の記憶はほとんどない。

父と母は、私の代わりとでも言うよう、辛かつた時の記憶を持つている。それ故か、体調管理に関しては厳しい私が風邪を引くと、すぐに小言を言う。一晩中起きていたと言えば、「バカかっ！」と返答される。何がきっかけで再発するか分からぬのだから、油断するなどと外に伝えているのだ。まだ病いを遠いものと考へている私には

丁度いいのかもしれない。だが、そんな私にも少しだけ変化があつた。自分の病気について調べてみたのだ。難しくてよくわからぬままだが、以前よりも健康を気に掛けるようになった。運良く助かった命を無駄にはできない。

生き永らえられた今、自分は今後、何をしたいのかと考えることがある。就職は必ずすると決めた。が、その後がまだ分からぬ。ただ、家族を支えられるようになる。それだけは揺るがない思いだ。

家族がそうだったように、私も必死になつて皆を支えたい。辛いなら、無理をせず弱音を吐いて欲しい。私は最後までそれを聞く、そして共にがんばる。

私は最後まで、家族の空になろう。



あまのはしだて 天橋立図 一幅 原在中筆

日本二景のひとつとして知られる天橋立は、宮津湾と阿蘇海（與謝海）を隔てる砂嘴（沿岸流によって運ばれた砂が堆積した地形）で、その絶景は古くから人々に親しまれてきました。

本図は、大内峠からの眺望と推定され、天橋立をはじめ彼方にみえる若狭との境の大浦半島までもが俯瞰的に描かれています。白砂を覆うようにして配された松林や海原にみえる数隻の舟は細緻に描写されており、雄大な景色でありながらも、神が宿ると詠われるような氣品ある雰囲気を醸し出しています。

筆者の中原が実際に当地を訪れて天橋立を鑑賞した眞景図落款（画家の署名）には、

□縦48・8×横86・0
□江戸中期
□賃 加茂季鷹
□落款 與謝海天橋立寫眞
原在中
□印章 「原致遠印」白文方印

〔贊文〕
くしきかも
あやしきかもや
わたつみ
和堂都海の
なみのづえ
浪上なる

あまの橋立
季鷹

あることが記されています。

筆者の中原は京都の人で、一説に小浜藩主・酒井家と姻戚関係があるとされています。画を狩野派の石田幽汀に学び、大和絵を独学で習得しました。主に宮中、公家、寺院の襖絵や調度品の御用を勤めるなどして活躍しました。天保8年（1837）88歳没。

賃者の加茂季鷹は、宝曆4年（1754）京都の上加茂神社の社家であつた山本家に生まれました。有栖川宮職仁親王に寵遇され、和歌の指導を受けるなど、和歌、狂歌、書に通じ京都歌壇の代表的な存在となりました。

福井の民俗文化

暮らしの
古典

福井県の虫送り

シリーズ 2

虫送りとは何か？

「虫送り」とはウンカ、ニカメイチュウなど、主として稻の害虫をムラの外に追放する呪術的な行事です。近年は農薬の普及に伴って虫害も少なくなり、「虫送り」も急速に消滅しました。現在、福井県内でもこの行事が残る地域は僅かです。

小浜市宮川地区では毎年八月十日に旧・宮川村の八つの地区（旧字）でそれぞれ一斉に虫送りが行われます。地区ごとに松明が作られ、太鼓とともに松明を翳しながら田の畦道を練り歩きます。松明は三メートルぐらいの竹に麻柄や萱、稻藁などを巻きつけたもので、各地区同じような形です。最後は宮川小学校に集まり、太鼓の競演後、虫供養の法事が行われます。

このように「松明を翳しながら田の道をまわる」のが虫送りの特徴のひとつです。虫送りは全国的に田植え後から八月にかけて行われており、各地域の虫送りの日程は決まっています。

越前市（旧・武生市）新保町の虫送りは毎年八月七日の七夕行事とともに行われます。子供たちが中心となり、竹の枝に短冊をつけた七夕竹や二メートルの竹に稻藁を巻きつけた松明を作



越前市新保町「虫送り」



鯖江市助生田町「虫送り」

「こぬか虫送り」に関して「鯖江市史」の「民俗編」には次のような言い伝えが記載されています。

「昔、戦争のとき、ある武将が稻株につまずいて転倒したところ敵に打ち殺されたので、その武将が恨んでこぬか虫になり、稻に害をおよぼすようになった。そこで、これを聞いた農民たちは、その武将を慰めるために、この行事をはじめたものである。」

この武将について誰なのかといった記述はありません。しかし、助生田の長老から興味深い話を聞くことが出来ました。戦前には「ナオイまで送れ」とも唱えていたというのです。

この「ナオイ」とは鯖江市北部に位置する南井（ナオイ）町のことであり、そこは平安時代末期の武将「齊藤実盛」が生まれたムラであるという言い伝えがあります。つまり、恨みで害虫となつた武将とは齋藤実盛であり、慰め送り出す意味の「南井まで送れ」だつたのです。

「虫送り」は主に中部地方以西で、この実盛伝説がもととなって行われおり、「実盛送り」や「実盛祭り」などとも呼ばれています。齋藤実盛の藁人形（実盛人形）を作り、松明とともに田を練り歩く形態が広く分布しています。

日「辻堂祭」と称した地蔵盆を行われます。暗くなると地蔵堂である「辻堂」前に篝火を焚き、少年達は松明に火をつけて「こぬか虫送れ。松明送れ」と唱えながら田の道を練り歩きます。

若狭地方では稻の害虫である「クチソゾウ」を「善徳（ゼントク）虫」と呼んでいます。「昔、善徳という坊さんが賊（またはムラ人）に殺され金を奪われた。その恨みから害虫になつた。コクチソゾウが黒いのは善徳の衣が黒かったから」との言い伝えがあります。三方郡美浜町野口の虫送りは七月二十四日の「愛宕祭」のときに、昭和二八年まで行われていました。松明を翳しながら「獅子、豆食わんよ。狼、小豆食わんよ。ゼントク送れ」と唱えていたといいます。敦賀市色浜、二村にはそれぞれ「善徳塚」があり、色浜では害虫が出ないように六月初めに「虫供養」が行われています。



実盛人形
(愛知県稻沢市祖父江町島本新田)

平成22年度 財団助成事業決まる

文化団体など 113 団体に 1,939 万円を交付

福井県内の文化振興を図るために、文化団体等の事業活動に支援する平成22年度の助成事業は、4月20日に公募申請を締め切り、4月1日と5月18日の2回に分けて助成事業選考委員会を開催し、その結果の答申を受けて、113団体に対し、1,939万円の助成交付金を決定しました。助成対象別の交付決定は、下表のとおりです。本年度初めて助成を受けた団体数は、42団体で全体の約37パーセントです。

平成22年度 財団助成事業交付金一覧

事業大別	助成対象事業	団体数	助成交付金 (千円)
地域文化の振興事業	郷土の歴史・文化の保存伝承事業	16	2,430
	市民文化団体等の活動事業	35	5,300
	国際文化交流事業	3	580
	文化のまちづくり事業	18	3,100
ふれあい及びゆとりの創造事業	ボランティア団体等活動事業	10	1,240
	各種文化サークル活動事業	11	840
	環境保全等地域づくり事業	14	2,600
芸術鑑賞機会の提供及び文化創造事業	市民参加型芸術文化活動事業	5	1,300
福井県高等学校総合文化祭育成事業		1	2,000
合 計		113	19,390

げんでんふれあいコンサート2010

岩崎宏美 35th Anniversary コンサート



熱唱する岩崎宏美さん

当財団主催の「げんでんふれあい」コンサート「2010」、「岩崎宏美35th Anniversary」を5月8日、敦賀市コンサート、(原電協賛)を5月8日、敦賀市人気から敦賀市民のほか、福井市等から多くのファンを集め、チケット発売2日で完売という超人気ぶり。会場満員の約1200人の聴衆に持ち前の豊かな声量と抒情的な歌声

2部構成から成り、1部では、デビュー当時の歌「ロマンス」「センチメンタル」「ファンタジー」等の曲をメドレーで次々と歌い上げました。また曲の合間にトークで、「初めて発売された自分のレコードを近所のレコード店に買いに行き、歌手になった事を実感しました。」と当時のエピソードを懐しそうに話していました。2部ではオリジナルヒットソングのほかマイク無しで「月見草」を声量溢れる歌声で熱唱したほか、大ヒットとなつた「聖母たちのララバイ」を歌い上げると、実力派歌手の美声に会場から盛大な拍手が送られていきました。



豊かな声量でファンを魅了する岩崎さん

『滋賀県物産誌 首巻・敦賀郡編』刊行

若狭路文化研究会



明治初期における福井県嶺南地域の物産・物流を調査した

『滋賀県物産誌 首巻・敦賀郡編』
(A5判 392頁3千円)

若狭路文化研究会（金田久輝会長）は、「げんでんふれあい財団」と共同し、「滋賀県物産誌 首巻・敦賀郡編」の復刻版を4月に出版しました。福井県は明治14年2月に誕生しましたが、この調査が行われた明治10年代当時、福井県の嶺南地域は滋賀県の管轄にあり、当時の滋賀県が県を治めるため、管内の物産等の統計およびその盛衰の沿革を、その主要な目的として刊行したもの。復刻版として今回出版するものです。この「滋賀県物産誌」は主巻1巻と、管内17の郡別（福井県分は第14巻大飯郡・第15巻遠敷郡・第16巻三方郡・第17巻敦賀郡）により構成。今回の復刻版は本の表題こそ「滋賀県物産誌」ですが、その記録は福井県嶺南地域の統計であり、村ごとの地理概要と人口、物産（製造物・農水産物）、牛馬、荷車、車輛、船舶、水車等の貴重なデータが収録されており、当時の嶺南地域の情勢を知る上で大変重要であります。今回は「敦賀郡」の出版ですが、今後「三方郡」「遠敷郡」「大飯郡」が刊行され、明治初期の嶺南全体の地域像を明らかにしていく事が必要であると考えられます。

環境・エネルギー国際講演会

APEC エネルギー大臣会合開催記念



ドイツの環境問題やエネルギー政策について講演するミヒヤエル・ドルフェル氏

本年6月の「APECエネルギー大臣会合」の本県開催を記念して、5月22日福井市のアオツサで環境・エネルギーについての国際講演会が開催されました。知事が昨年ドイツのザクセン・アンハルト州を訪れ、同州との間で環境分野の交流を進めました。環境・エネルギーについての国際講演会が開催されました。

この講演会は、5月22日福井市アオツサで開催されました。環境・エネルギーについての国際講演会が開催されました。この講演会は、5月22日福井市アオツサで開催されました。

読者アンケートのまとめ

「げんてんふれあい福井(35号)」について

財団情報誌35号(平成21年11月発行)のアンケートに、回答をいただきありがとうございました。

第35号で良かった記事

- ふくい県民総合文化祭 11名
- 戦国大名「朝倉氏の歴史と文化(五)」 16名
- ふるさと福井・人物シリーズ「食育の祖 石塚左玄(一)」 12名
- ふくいの伝統行事シリーズ「相撲甚句」敦賀市阿曾 8名
- 福井の文学碑「詩人・評論家 藤原定」 9名
- 若狭路文化研究会 10周年記念フォーラム 4名

本誌へのご意見・ご要望

- 写真が美しく、文章をひきたてている。
- 一乗谷遺跡で多数の出土遺物、国指定の重要文化財があるのに驚きました。
- 石塚左玄の記事がとても勉強になる。今後も続けてください。
- 毎号、福井にこんな伝統行事、神事等があったのかと興味深く観させていただいている。
- いつもていねいな誌面づくりをされている。
- 県民の暮らしにうるおいを与えるような活動を、地道に続けていて欲しい。
- 日頃の活動には感謝している。特に地域文化の助成には大きな助けとなっている。
- 狂言を楽しむ会に出席した。今後も、地方で歴史ある芸術芸能の開催をよろしく。
- 財団主催イベント回数を増やしてください。
- 俳句の句集、短歌の歌集などへの助成があるとよい。

これからも誌面の充実に努めてまいりますので、今後ともご支援を賜りますようお願いします。(編集係)

文化講演会「“自然派”陽だまり人生のススメ」

増岡 弘さん(俳優・声優)語る

敦賀市連合婦人会と当財団の共催で4月10日、敦賀市北公民館において俳優・声優の増岡弘さんを招き、「“自然派”陽だまり人生のススメ」と題して文化講演会を開きました。増岡さんは、テレビアニメ「ザ工さん」のマスオさん役、「それいけアンパンマン」のジャムおじさんの声優として活躍、また埼玉県で手作り味噌を作る自然法人「みそひともんちやく」を結成、品評会



「言葉を大切に」と講演する増岡弘さん

を開催するなどナチュラリストとしてTV出演も多く、幅広い活動をしています。講演で増岡さんは「夫婦愛、家族愛、隣人愛の大しさをエピソードを交えながら話しそが必ず見えてきます。また、人が格の半分は言葉によって決まります。相手を思いやる心が大切です。」と語り、会場に集った約120人の聴衆は増岡さんの笑いや、涙を誘う軽妙な語り口に、会場は沸き、興味津々に聞いていました。

生誕100年記念フォーラム

白川文字学を知る

福井市出身で福井市名誉市民、漢字学者で文化勲章受賞者の故白川静博士の生誕100年を記念するフォーラムが4月24日、県生活学習館で開催されました。白川文字学を広く国内外に発信していく事業として誕生日の4月9日を記念して県が主催。古代文字による書道パフォーマンスから始まり、白川博士の長女、津崎史さんから父、白川博士のやさしい人柄をしのばせる多くのエピソードが紹介されました。この後、ベストセラー「白

白川静博士生誕百年記念フォーラム

主催 福井市 福井県教育委員会



松岡正剛さんの基調講演

川静の著者松岡正剛さんの「東洋と西洋のあいだ」と題し基調講演がありました。講演で松岡さんは「白川さんの功績は甲骨文字と新しい文字に至る不明の部分を解明したこと。この解明には、西洋の一神教」東洋の多様性の文明の分析、さらには『万葉集』等の研究により古代中国の仕組みを解いたところが凄い」と発想の独創性を讃えました。約430人の来場者は福井が生んだ偉人を偲び興味深く聞き、メモを取りっていました。

第13回 2010 写真コンテスト

募集要項

- テーマ 「ふるさとの味わい・ふくいの食」
- 部門 学生の部(高校生以上)・一般の部の2部門
- 資格 ①福井県に在住、又は学校・勤務先が福井県内であること。
②写真の専門家(プロカメラマン)でないこと。
- 作品 応募点数は制限しません。ただし応募者本人が県内で2008~2010年に撮影したもので、自作の未発表作品に限ります。
- 作品の規格 カラー・モノクロで四ッ切、又は四ッ切Wの単写真のみとします。(デジタルプリントも同様)
- 応募方法 所定の応募用紙に必要事項を記入し、作品の裏にセロテープで貼って提出してください。
- 締切 平成22年12月10日(金) 当日消印有効
- 発表 平成23年1月下旬
※入賞者にはご通知いたします。
- 表彰式 表彰式(優秀賞以上)
平成23年2月7日(月) 〈ふるさとの日〉
- 展示会 敦賀、福井市の2会場にて写真展を開催し、作品を広く県民の皆さんに公開します。
- その他 ①デジタルカメラの作品は合成や特殊加工がないもののみ可とします。
②入賞者には、ネガ・リバーサル等原版(デジタルカメラの場合は未処理データ【原画】をCDなどにコピーしたもの)の提出を求めます。
③応募作品は返却しません。但し返却を希望される方は「返却希望」と封筒に朱書きし、500円分の切手を同封してください。
④入賞、入選作品の使用・著作権は主催者に帰属し、財団のPR活動等に使用させていただきます。
- 応募先 問合せ先
①914-0051 福井県敦賀市本町2丁目9番16号
財げんでんふれあい福井財団
②福井県カメラ商組合店 及び
県内フジカラー取扱店

ふるさと大賞

写真コンテスト



第12回 ふるさと大賞作品「蒸気霧立つ」三上 彰さん(福井市)

賞 金

ふるさと大賞	1点	賞状・トロフィ・賞金30万円 <small>※高校生の場合は、賞金相当額の記念品とする。</small>
ふるさと賞	3点	賞状・トロフィ・賞金 <small>学生:5万円1点/一般:10万円2点</small>
優秀賞	5点	賞状・トロフィ・賞金 <small>学生:3万円2点/一般:5万円3点</small>
入選	30点	記念品 <small>学生:記念品5点/一般:記念品25点</small>
佳作	30点	記念品 <small>学生:記念品5点/一般:記念品25点</small>

主催：財げんでんふれあい福井財団

後援：福井県／福井県教育委員会／敦賀市／敦賀市教育委員会／社福井県文化協議会／福井県高等学校文化連盟／株福井新聞社
FBC福井放送／福井テレビ／株嶺南ケーブルネットワーク
協賛：福井県カメラ商組合／富士写真フィルム株／フジカラー北陸㈱

財団イベント INFORMATION

ビートフェニックス 2010	加藤ミリア、清水翔太、 近藤夏子 他	9/4(土)	福井市エルバ屋上駐車場 特設ステージ	FM福井主催、財団協賛 (前売り)6,500円
京都市交響楽団 オーケストラコンサート	斎藤一郎(指揮者) 戸田弥生(バイオリン) 京都市交響楽団	9/23(木・祝)	パレア若狭音楽ホール	パレア若狭主催、 財団協賛 4,000円(全席指定)
げんでんふれあい コンサート2010	谷村新司～ココロの学校～	10/3(日)	福井フェニックスプラザ 大ホール	財団主催 2,000円(全席指定)
第14回 福祉演芸会	来世楽(津軽三味線) 林田麻友子(歌手)	10/5(火)～7(木)	県内6福祉施設	財団主催 無料
能を楽しむ会	味方 玄 他	11/4(木)	敦賀市プラザ萬象 能楽堂	財団主催 無料

